

39 平成 17 年度千臨技血清検査部門精度管理集計報告

○栗井康伸(船橋市立医療センター) 森川一裕(千葉県立東金病院) 村澤利延(千葉市立海浜病院) 河原 進(国保松戸市立病院) 吉本晋作(順天堂大学医学部附属順天堂浦安病院) 澤部祐司(千葉大学医学部附属病院) 小鮎哲也(社会保険船橋中央病院)

【目的】平成 17 年度血清検査部門の精度管理集計を報告する。

【方法】試料は A, B の 2 種類を用いた。試料 A は梅毒抗体陽性、HBs 抗原と HCV 抗体が陰性、試料 B は梅毒抗体陰性、HBs 抗原と HCV 抗体が陽性とした。梅毒抗体検査は定性および定量試験、HBs 抗原検査と HCV 抗体検査は定性試験を実施した。

【結果】梅毒抗体検査(SST)では 77 施設から 83 の回答があった。試料 A で陽性と回答した施設は 69 施設(89.6%)、判定保留は 3 施設(3.9%)、陰性は 5 施設(6.5%)であった。試料 B で陰性と回答した施設は 77 施設(100%)であった。梅毒抗体検査(TP 抗体)では 82 施設から 98 の回答があった。試料 A で陽性と回答した施設は 78 施設(95.1%)、判定保留は 4 施設(4.9%)であった。試料 B で陰性と回答した施設は 82 施設(100%)であった。HBs 抗原検査では 86 施設から 100 の回答があった。試料 A で陰性と回答した施設は 86 施設(100%)、試料 B で陽性と回答した施設は 86 施設(100%)であった。HCV 抗体検査では 82 施設から 98 の回答があった。試料 A で陰性と回答した施設は 82 施設(100%)、試料 B で陽性と回答した施設は 82 施設(100%)であった。

【まとめ】HBs 抗原検査および HCV 抗体検査は極めて良好な結果であった。梅毒抗体検査において陽性とすべき試料 A の判定結果に乖離がみられた。これらは測定試薬の感度、反応する免疫グロブリンクラスの違いも原因として考えられる。さらにはサーベイ試料の力価など、外部精度管理を行うにあたり今後の検討課題である。

連絡先 047-438-3321(内 5205)

40 髄液検査で腺癌細胞を発見した 2 例

○安藤 正 長谷部れい子 相原 茂(君津中央病院検査科) 松尾真吾 國松栄二 井澤敏明(君津中央病院病理検査科) 八木下敏志行(君津中央病院神経内科医長) 松寄 理(君津中央病院病理検査科医長)

【はじめに】今回我々は、一般検査に患者情報が無く提出された髄液中に、腺癌細胞を発見した 2 例を経験し、細胞観察の重要性、他部門との連携の大切さを再認識したので報告する。

【症例及び臨床経過】症例 1) 73 才男性。H.16.10 胃癌にて胃全摘。術後半年頃よりベッドから起きる事が少なくなり、その後ほとんど体動及び経口摂取が無くなった為当院救急外来受診、脱水ひどく緊急入院となる。入院直後より意識障害が遷延し、原因検索の為髄液検査施行。症例 2) H.13.10 肺癌にて左上・下葉切除。約 3 年後、脳転移が見つかる。外来加療中、神経症状が続いた為神経内科受診、髄液検査施行。

【髄液所見】症例 1) 細胞数 $92/\mu\text{l}$ 、出現細胞の大部分は、 $20\sim 30\mu\text{m}$ 前後のやや大型でサムソンに濃染した単核で核小体の目立つ異型細胞が占めており、印鑑細胞様の細胞も認められた事から腺癌を疑った。症例 2) 細胞数 $12/\mu\text{l}$ 、サムソンに濃染した $20\mu\text{m}$ 前後の単核の異型細胞を数個認め、細胞質内に空胞状構造を持つ $30\mu\text{m}$ 前後の大型の細胞も見られた事から腺癌を疑った。2 例ともに残存髄液の細胞診で、class V adenocarcinoma と診断された。

【考察及びまとめ】今回、患者情報が無く提出された髄液中に異型細胞を発見し、腺癌細胞と確定するに至った 2 例を経験した。髄液中に白血球以外の細胞が見られる事は少なくないので、改めて一般検査における細胞観察の重要性と患者情報の必要性、臨床側、病理・細胞診との積極的な連携の大切さを再認識した。

0438-36-1071 内線 3351